



4/11

ガーベラのように輝いて

J A おおいがわのガーベラ専門部会の青島康浩さんから、4月18日のガーベラ記念日にちなみ、ガーベラの花で「輝」の文字をかたどったモニュメントを贈呈されました。

「医療の現場で働くみなさんに一層輝いてもらい、市民に元気を与えてほしい。」という青島さんの言葉に、花束を受け取った新人看護師は、「鮮やかな花の色で気分も明るくなる。患者さんにも喜んでもらえると思う。」と感謝していました。

ガーベラのセラピー効果。赤いガーベラは「低血圧・頭痛・めまい」の症状に、黄色いガーベラは「胃腸が弱い・食欲不振」の症状に効果があると言われています。



5/24

ボランティアサークル、全国表彰される!

5月24日、当院でボランティア活動を行っている“ボランティアサークル”に全国自治体病院協議会会長賞が贈られました。

この賞は地域医療に貢献した医療関係者やボランティアなどの地域住民・団体に贈られます。代表の川嶋由紀子さんが表彰状を受け取りました。

“ボランティアサークル”は平成7年に当院が駿河台に新築移転した時に発足しました。外来での車椅子のお手伝い、病棟での図書ボランティアなど、患者さんの受診環境・入院環境の向上に努めていただいています。

受賞おめでとうございます。



エプロンがトレードマークです!



藤枝市立総合病院だより

おもいやり

O-moi-yari



Fujieda Municipal General Hospital



病院に爽やかな風を吹き込む!

患者さんの笑顔が
私たちの元気で

新人薬剤師・検査技師

急性期医療を担う看護師・助産師を募集中

対象

①正規職員

昭和48年4月2日以降に生まれた、すでに看護師・助産師の免許を有し、交代勤務が可能な人

②臨時職員

フルタイム・パートタイムで勤務可能な看護師・助産師。また、救急外来などの夜間専従看護師も募集しています。夜間専従看護師の勤務は3日に1回、月10回程度です。

申し込み・問い合わせ

病院総務課 人事係 ☎646-1111 (内線7120)



7B病棟スタッフ

◇ 詳しくは当院のホームページをご覧ください ◇

藤枝市立総合病院

検索





教えて、防災授業!



藤枝中学校での防災指導

去る5月21日に、藤枝中学校の3年生を対象に当院看護師が防災授業を行いました。
なぜ、今、中学生に防災指導が必要なのでしょう。災害派遣医療チーム(DMAT)の一員として防災授業を行った實石看護師に答えてもらいました。

Q いつからこの構想を考えていたのですか

A 市民への防災教育の必要性を考えていたのは、3年位前からです。そうですね、東日本大震災の前からですね。震災があって、より早く取り組まなければならないと思いました。具体的に中高生を対象に教育をしたいと考えたのは昨年度です。



Q 中学生には災害時にどんなことを期待しますか

A 日中、災害が発生した場合、地域に残っているのはほとんどが高齢者と学校にいる生徒です。災害について知識や関心を少しでも持ってもらうことで、自主防災への参加も期待できます。まずは、負傷者の搬送などを勉強し、最終的には、炊き出し訓練や救護所の設営などにも積極的に参加してくれることを期待しています。

Q 今回はどんな内容の授業を行ったのですか

A クラスごと、50分授業を2回行いました。1時限目は、学校に備え付けの担架による「搬送訓練」、竹刀やバットなどを使っての「足の固定法」、体操着を活用した「腕の固定法」です。2時限目には、AEDによる心肺蘇生法を勉強しました。どの生徒さんも真面目に取り組んでくれましたよ。

Q 防災授業に対する病院としての応援体制はどうですか

A 災害時に病院機能を発揮するためには、日頃の市民の理解が大切です。特に中高生を対象に教育を行うことで親世代への波及効果もあると考えます。現場(病院)のスタッフが教育を行うことでより効果ができるということを病院としても理解し、同僚看護師などの応援体制の中で授業を行うことができました。

Q この授業は、今後、どのように展開していくのですか

A 今年度は、藤枝中学校を含め3校での実施を検討しています。毎年、対象校を増やして、将来的には市内すべての公立中学校で実施していきたいと考えています。行政と協力して実施できることが望ましいと思います。



心肺蘇生法の体験

Q DMATの一員として東日本大震災の現場で活躍した看護師としてメッセージをお願いします

A 災害時には、病院として、行政として、避難所・救護所として、そして市民としてのそれぞれの役割があります。その役割や機能が発揮されてこそ災害に強いまちができると考えます。この授業を通して、一つでも自分にできることがあることを発見してもらえればいいと思います。

「放射線診断科」って

何をするところ?



みなさんの疑問にお答えします!

みなさんが意外と知らない「放射線診断科」の仕事について、五十嵐部長に聞いてきました。

● 放射線診断科の仕事とは?

「放射線科の医師だよ」というとかなりの確率で「ああ、レントゲン撮影してる人ね」と答えて返ってきますが違います。われわれはふつうのお医者さんのように外来で「今日はどうされましたか」と診察する医師ではありません。主な仕事は主治医の先生方がオーダーするCT、MRIや核医学検査を適応を遵守して適切に施行し、それを解析(読影といいます)して病気の有無やそれがなにか、どこまで広がっているか、治療が必要かどうかなどを判断するのが主な仕事です。普段は地下の読影室にすることが多いです。(病院内の引きこもり)「縁の下の力持ち」といえば聞こえがいいでしょうか。

そんな「放射線診断科」ですが仕事は大きく分けて2つあります。ひとつは前述のCTやMRI、エコー、核医学検査などの「画像診断読影業務」と「IVR(アイ・ブイ・アール)」です。IVRとは聞き慣れない方も多いでしょうが、画像診断手技を用いて行う治療であり、上手な日本語ができなため、IVRが通称となっています。(ちなみに学会名も日本IVR学会です)IVRは血管系と非血管系の2つに大別されます。

血管系とは、悪性腫瘍の血管を詰めたり、動脈硬化で狭くなった血管を広げたり、抗がん剤を流したり、異物を取り除いたりすることで、非血管系は、腫瘍の組織を取り病理検査をしたり、膿の塊を排出したりすることです。

スタッフは、今年度から医師が1名増え、3名での体制となりました。私五十嵐達也と池田暁子医師、鹿子裕介医師、あとは専属の看護師がついてくれるといいですね。静岡県の自治体病院は放射線科医がない病院も多いですが、うちは恵まれています。

現在、3名の医師で、外来や入院患者、救急での患者も入れて、一日約80件を処理しています。そのうち、IVRの患者さんは月に12~15件くらいでしょうか。一日ずっと読影するというのであれば、医師一人で30件から40件は見るができますよ。

読影は、一人の患者さんに対して、5分以内に終わるものもあれば、30分を超えるケースまでさまざまです。頭の単純CTであれば画像は20枚くらいですが、乳腺MRマンモグラフィの場合は、画像が1,000枚くらいになり、エコーや単純写真と比較しながら総合的な診断するので時間がかかりますね。場合によっては、文献を調べたりして2・3日かかることもあります。

カテーテルの検査も1件2~3時間かかりますが、ない限りは、毎日、地下の読影室で画像を読んでいることが多いです。最近は好きなソフトボールもできていませんね。ただ、3人のチームワークはバッチリです。

● 明るい未来

私が「放射線診断科」を選んだのは、先輩が、「頭のとっぺんから足の先まで勉強できる」と熱心に誘ってくれたこと。そして、外科や内科の先生とのチーム医療ができることに魅力を感じたからです。画像診断がばっちり当たった時が「放射線診断」の醍醐味ではないでしょうか。また血管内治療しかできないとき、止血できて一命を取り留めたときなどが「IVR医」としてうれしいときですね。

今後、画像診断の技術はもっともっと発達していくでしょう。しかし、放射線科医師はまだ足りていないのが現状です。新しい機械ができて、わかること(発見できること)が増えていきます。また、IVR領域でも新しい薬や機械が開発され、低い侵襲で手術と同じくらいの治療効果がえられる治療が増えており、まだまだ伸びていく分野です。「放射線診断科の未来は明るい!!」と感じています。

